

ポスター発表「学校にウサギとチャボがいる」

～授業での活用の可能性を探って～

八木 良子



1 はじめに

学校にいる飼育動物をいろんな授業で活用したいと考えている。

本校、チャボ3羽(うち1羽9月に死去)、ウサギ3羽がいる。チャボは、生育歴などの記録がないために定かではないが、たぶん10歳くらいと思われる。2年前くらいまでは、盛んに卵を産んでいたが、最近は産卵はまれとなり、だんだん老いていっている状態である。

飼育に関しては、児童による委員会活動が盛んで、餌やり、飼育舎の清掃、動物の運動などの世話をしている。委員でない児童も自由に飼育舎での動物たちの様子を観察でき、昼休みには、ふれあいランド(飼育動物の運動場)で動物たちを運動させる様子などを見たり、抱っこしたりすることもできるようにしている。何とか、これ

らの動物を授業に活用したいと思い、これまで1, 2年生の生活科, 3, 4, 5, 6年生の理科では、単元に沿って、学校飼育動物を観察したり、実際に触れ合ったり、時には心音や脈拍を測ったりする等活用の場面を考えてきた。

今回は、1, 2年生の道徳での学校飼育動物の活用例について報告したい。

2 道徳「ウサギのきもち」 3- (2)

(1) 単元設定の理由

○児童の実態

1, 2年生, 111名中, 80%ほどの児童が「現在, 犬・猫・ハムスター等の動物を家で飼っていない。」と答え, また, 70%の児童が「虫や魚なども含めて動物の飼育経験が全くない。」と答えている。昨今の都市部の住宅事情や両親ともに働き, 日中留守にする核家族が多いなどの生活スタイルも影響してか, 小動物を飼育する家庭は多くない実態である。

○社会の要請

凶悪事件などの前兆として, 小動物を傷つける事案などがあるが, 実際に幼少期より小動物に触れる経験がないことから相手の痛みがわからないなども考えられる。また, ゲームなどの仮想世界で簡単に命が扱われることも遠因ではないかと言われて久しい。学校などで小動物を飼育し, 世話をする機会を得, 「生・生きる, 生まれる。老・老いる。病・病む。死・死ぬ。」という生物の営みに寄り添うことは児童の精神的成長に有効であると思われる。

○道徳に期待されること (学習指導要領道徳「内容」より 抜粋)

以上のような三つの側面から, 以下の目標を設定した。

3 本単元「ウサギのきもち」でのねらい

紙芝居「ウサギのきもち」を使い、実際に学校にいるウサギやチャボの様子を想起させながら、ロールプレイやプリントに記入するなどの活動によって、児童の心身の発達段階に応じて、以下のことができる児童を育成する。

- (1)命を大切にする。
- (2)生き物に優しく接する。
- (3)どのような態度で接したらいいか生き物の立場で考え世話をする。

4 授業の実際

(1)1年生, 2年生の実態

1年生は、生活科の「いきものとなかよし」などで飼育舎のウサギやチャボの観察をしたり、餌やりを体験したりしている。家で昆虫や金魚などの飼育経験はあるものの長期にわたって動物の世話を経験したことのある児童は全体の30%ぐ

らいである。そんな中ウサギやチャボを見るのも触るのもはじめてという児童も多く、「かわいい」「ぬいぐるみみたい」と感想は持つものの、「どうやって抱っこしていいのかわからない」「ちょっと、こわい」となったり、抱っこしたりと接触を持つことが進んでできない児童もいる。

「主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」

- (1) 生きることを喜び、生命を大切にする心を持つ。
- (2) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。

低学年の段階においては、特に身近な自然の中で遊んだり、動植物の飼育栽培などを体験し、自然や動植物などと直接触れたりすることを通して、それらに対するやさしい心を養うことが求められる。動物や植物の持つ不思議さ、生命の力、そして、ともに生きていることの愛おしさなどを感じることによって、自然や動植物を大事に守り育てようとする気持ちが強く育まれる。



【1年生 生活科「学校たんけん」】
いきものとなかよくなるう



【生活科「いきものだいすき」観察カード】
ウサギの心音を聞いたこと

2年生は、生活科の「いきものだいすき」で、1年生の時から、飼育舎での観察をしたり、動物の餌やりなどをしたりしている。1年の後半、国語「知らせたいな、見せたいな」では、飼育動物の観察メモから学校で飼っている動物の紹介の作文を書いたり、図工では、「生き物と自分」の絵を描き、福岡市教育委員会と獣医師会共催の「学校飼育動物スケッチコンクール」に出品したりして教科での学習にも活用している。

また、冬には、老齢のウサギの世話で温浴さ

せ、手早く乾かすなどの処置をしている様子を観察したり、小屋の防寒対策について協力したりする経験もしている。1年生の2学期に、ウサギの死、チャボの死を経験し、お別れ会をしたり、数度は膝に抱いたり、なでたりしていて、ふれあう活動を多く経験している。

ウサギやチャボに関心を持った児童は多く、2年生は、4月当初、90%近い児童が「家で動物を飼ってみたい」と答えている。



【 2年 生活科 チャボの観察 】

運動させたり餌をやったりして世話を体験した。



【 チャボの突然の死 お別れ会 】

動かない体に驚く児童もいた。



【 昼休みの飼育舎へ 】

飼育委員が触れ合わせてくれている。 家から持ってきた野菜を刻んでえさ作りをしている。



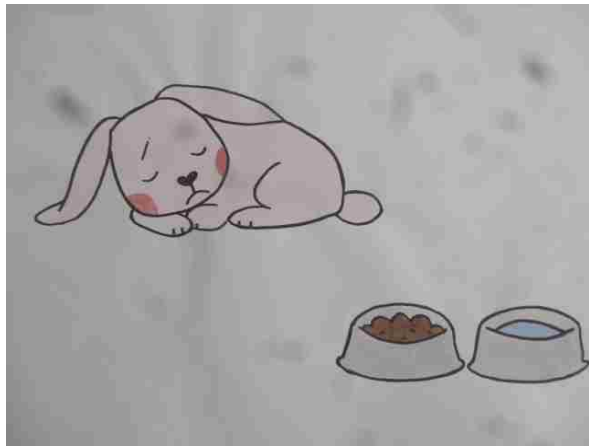
【 えさやりの手伝い 】

(2)紙芝居を使って 道徳の授業での活用

「学校のウサギ」(獣医師作, 紙芝居)を使用し, ロールプレイ, プリント等を活用.

○学校のウサギ 紙芝居のあらすじ

	<p>「学校のウサギ」</p> <p>〇〇小学校にウサギがやってきました。 「みなさん, かわいがってくださいね。」 「はい。」</p>
	<p>みんなは, 休み時間にウサギとあそびました。 だっこしたり, 耳を引っ張ったりおいかけっこをしたりしました。えさをたくさんやりました。</p>
	<p>休み時間おわりのチャイムがなりました。 「バイバーイー。」 ウサギに手を振って教室に戻る時, ウサギは地面をたんと蹴りました。 「またね, ウサギも喜んでバイバイしてくれているよ。」 とみんなは, 思いました。</p>



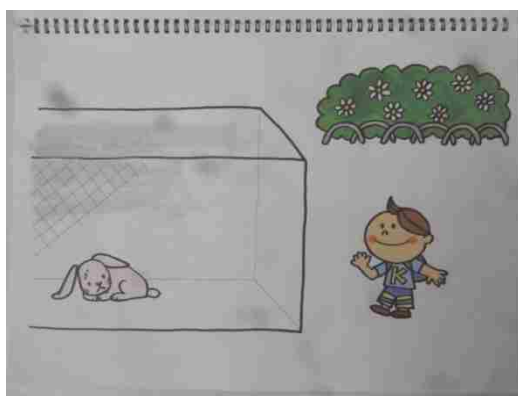
ウサギは、疲れてぐったりしています。えさも水もへりません。よほどつかれたのでしょう。もしかしたら怖かったのかもしれません。



その夜、けんたくんはウサギになった夢を見ました。昼間みんながウサギにしたことと同じことを自分にされるという夢でした。子どもたちに追いかけられたり、触られたりし、えさを無理やり食べさせられたり、とても怖い思いをしました。



ウサギが地面をたんと蹴ったのは、怒っていたのだと気持ちがわかりました。ウサギは、本当は、怖くて、とてもストレスがたまっていたのです。



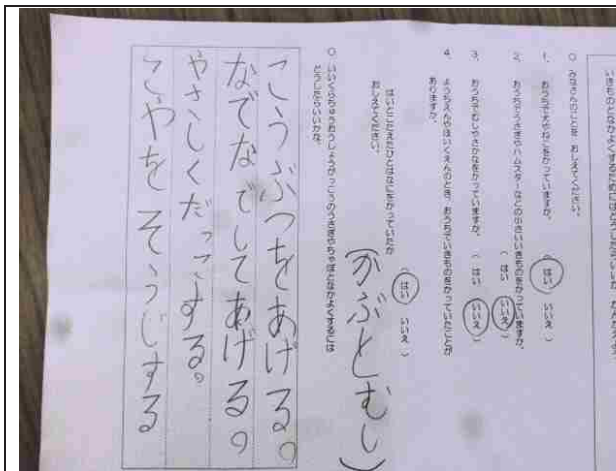
次の日、けんたくんは、ウサギに「ごめんね。」とあやまりました。そして、ウサギにとって本当にいいことはどんなことだろうと考えました。



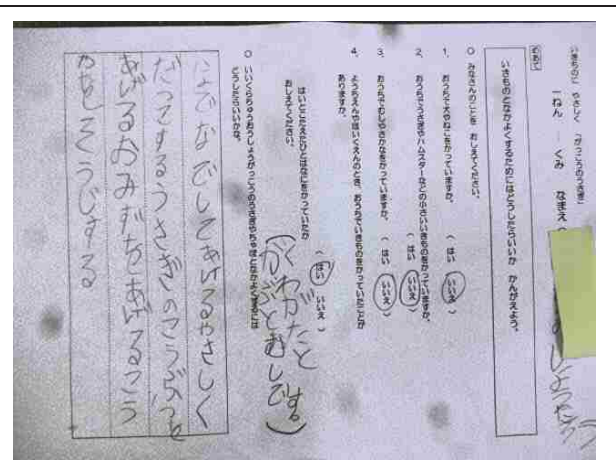
友達とも話しあって、ウサギの飼育舎の掃除をしたり、えさの準備をしたり、ウサギの身になってやさしく接するようにしました。ウサギも、とても安心した顔をしてくれるようになりました。

○児童の感想

- ・1年生のふりかえりより



【1年生のふりかえりプリント ①】



【1年生のふりかえりプリント ②】

1年生は、紙芝居を見たあと、ぐったりしているウサギ、笑顔のウサギのお面をつけて、ロールプレイをし、ウサギの気持ちを中心に考えることができた。学習の振り返りには、「ウサギは、みんなとあそんでよろこんだんじゃなくておこったんだね。」「みんなにさわられてこわかったんだね。」とウサギの気持ちに共感することができた。

設問 いいくらちゅうおう小学校のウサギやチャボとなかよくするにはどうしたらいいだろう。

この設問には、「こぶつをあげる。」「やさしくたっししてあげる。」「なでなでしてあげる。」「なでなでしてあげる。」などの

記述がみられた。

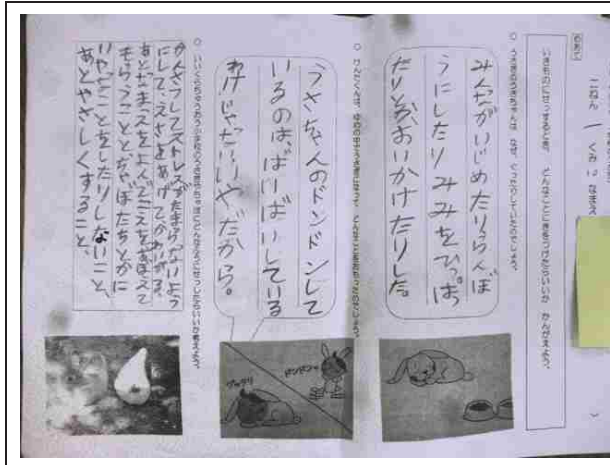
- ・2年生のふりかえりより

2年生のふりかえりプリントでは、下記のことについて書かせた。

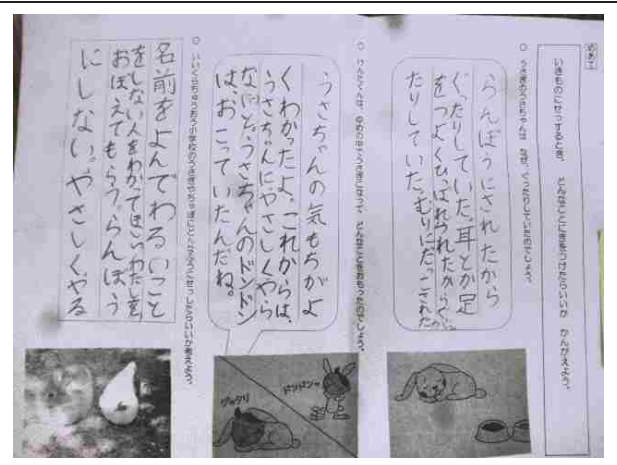
設問1 ウサギは、なぜぐったりしていたのでしょうか。

設問2 けんたくんは、ゆめの中でウサギになってどんなことを思ったでしょう。

設問3 飯倉中央小学校のウサギやチャボにどんなふうに接したらいいでしょう。



【2年生のふりかえりプリント①】



【2年生のふりかえりプリント②】

設問3の児童の感想には、「ウサギにわたしの声を聞かせて、悪いことをしない人だと覚えてもらう。」「毎日、お世話をして、覚えてもらう。」「観察をしてストレスがたまらないようにして、餌をあげる。ウサギがいやだと思わないようにする。」などの記述が見られた。1年生よりもよりウサギの立場になってどうしたらいいかということを考えた具体的な記述が見られた。

5 おわりに

本単元の学習では、2年生の児童が小学校の飼育動物をそばで見て触って感じていたことを多く発表する姿が見られた。昼休みにふれあいランドで飼育動物を運動させる時のことなど、「飼育委員の6年生が、ウサギやチャボにストレスがかけすぎないように、ふれあいランドに入って一緒にふれあう人数を制限していること」「餌をたくさんやりすぎないこと」「冬は寒さを防ぐ

ために防寒のシートを飼育舎の金網に貼っていること」「病気のウサギを病院につれていったり、お風呂に入れて清潔にしてやったりしていること」などをあげていた。

児童がウサギやチャボの「生・老・病・死」に大きな関心を持っていることがうかがえる。「うさぎに、声を覚えてもらう。」「何も悪いことをしないってことを分かってもらおう。」など、自分中心ではなく、ウサギの立場で考える姿も見られた。それは、一年間生活科や、委員会活動などで学校飼育動物を身近に見て、世話ができただけで導きだされた感情であると思われる。

飼育動物を抱っこしたり、観察したりすることによって、児童が精神的に成長することは数値などで表すことは難しいが、「動物の立場で考える」ことができるようになったことは、確かである。

これからも、道徳を含め、ほかの教科でも学校飼育動物の活用を考えていきたい。

(福岡市立飯倉中央小学校)